

明治以降における旧城址の土地利用変化

—盛岡城址・弘前城址の事例—

對馬和也

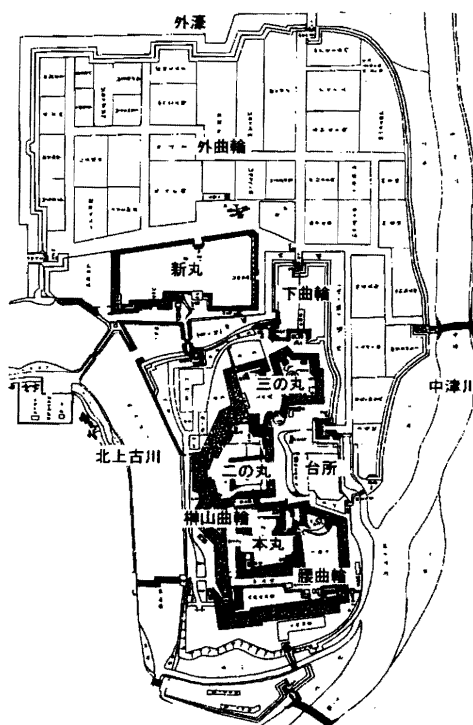
I はじめに

全国の都市には近世の城下町を起源としているものが多く認められる。地理学の研究においては、弘前を事例として現在の都市地域構造の成立にとって旧城下町構造がどのような役割を果たしてきたのかについて、都市構造への歴史的制約という観点から明らかにしようとした研究（横尾、1987）や盛岡を事例として市街地形態の変化と都心地区の形成について考察した研究（梅林・阿部、1981）などがある。しかし、これらの研究はいずれも旧城下町全体の変化を扱ったものであり、旧城址の土地利用に重点をおいた研究は少なくとも地理学の分野にはない。そこで全国の旧城址のほとんどが都市化の影響によって旧態をとどめていない中で、今日でもそれをほぼ維持している事例として弘前城址を、都市化によって旧態をほとんどとどめていない事例として盛岡城址を取りあげ、明治の廃藩以降の土地利用変化を考察していきたい。

研究対象である城址の範囲は、盛岡城址は後述する第1図の中津川・北上古川（北上川旧河道）・外濠に囲まれた範囲で、弘前城址は後述する第2図の外濠・西濠に囲まれた範囲である。

II. 盛岡城址の土地利用変化

明治期には明治4（1871）年に県庁が設置されたのをはじめとして、内山下にあたる外曲輪跡には裁判所、警察署、盛岡市役所などの官公庁が、旧藩主邸宅や藩の重臣屋敷跡の広大な土地を利用して設置された。この他、盛岡師範学校・岩手中学校などの教育施設、盛岡病院・私立岩手病院などの医療施設も見られる。また城址内には岩手県試験場や岩手公園・盛岡公園地（岩手公園開園後、廃園）といった公園緑地も見ら



第1図 江戸期の盛岡城 (1766)

「盛岡古地図」(1984盛岡タイムズ社) 収録「盛岡城下町絵図」附図による

れる。

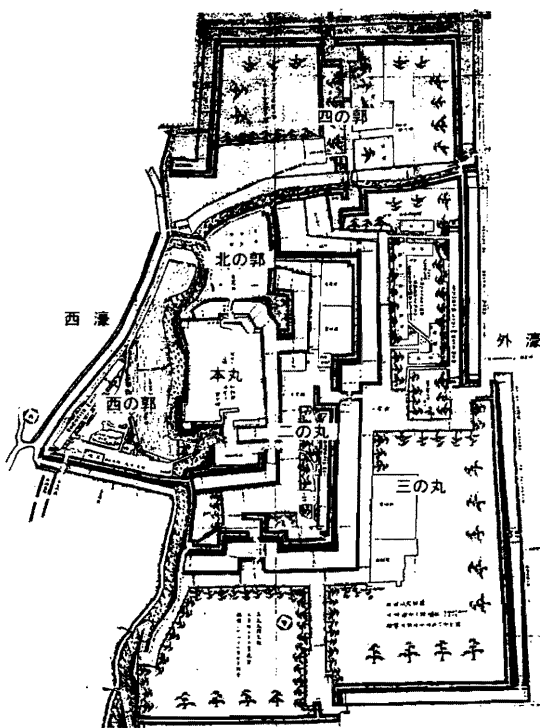
大正期から終戦までには、盛岡赤十字病院・盛岡実科高等学校・県立図書館といった医療・教育・文化施設が見られる。またこの頃、県立盛岡中学校（明治34（1901）年に岩手中学校から改称）・師範学校（男子）・県立工業学校が外曲輪跡からそれぞれ上田に移転している。終戦後の昭和20年代には、下曲輪跡に「ヤミ市」と呼ばれる露店が出現し、後の飲食店街形成に影響を与えた。外曲輪跡には国立盛岡病院の開設も見られる。昭和30年代には検察庁・法務局・公共職業安定所などの官公庁が見られる。昭和40年代には県立図書館の岩手公園内（現在地）への移転、県の盛岡地区合同庁舎、岩手県民会館（現在地）の開設が見られる。同62（1987）年には赤十字病院、県立中央病院が城址外に移転し、県立中央病院跡地は翌63年に県が管理する「緑の広場」として整備されている。

以上のように、現在は城址のおよそ南半分が公園となっており、外曲輪跡には県庁・裁判所をはじめとした官公庁のほか、岩手医科大学附属病院などの医療及び関連施設、県立図書館、岩手県民会館などの文化施設、岩手銀行・東北銀行などの金融機関の本店・支店、テレビ岩手・NTT東日本岩手支店などの放送・通信機関が見られる。

Ⅲ. 弘前城址の土地利用変化

明治の廃藩以後、城址は荒廃化が進み、明治の初めには二の丸馬場跡、四の郭跡の一部では果樹栽培が行われた。明治28（1875）年に城址全域が弘前公園として開園し、本丸・二の丸跡を中心に一時露店も見られた。その後、明治43（1910）年に招魂社（のちの護国神社）が四の郭跡に遷座、翌44年に北の郭跡に演武場（武徳殿）が建設、大正9（1920）年に西の郭跡に稲荷社が建立（昭和51（1976）年移転）、昭和8（1933）年に四の郭跡に陸上競技場（現レクリエーション広場）が建設、同27（1952）年には二の丸跡に児童遊園地が設置され、現在に至っている。

三の丸跡には明治4（1871）年に東北鎮台20番隊が設置されたが同6（1873）年に廃止された。その後荒廃が進んだが、同28（1895）年の弘前公園開園に伴い、三の丸跡も公園地となった。



第2図 江戸期の弘前城（1805）
『御城郭分間真図』（「絵図に見る弘前の町のうつりかわり」（1984、弘前市立図書館）収録）による

しかし同31（1898）年に一部を残して第8師団兵器支廠用地となったため公園地から除かれ、この状態が終戦まで続いた。

終戦後、旧第8師団兵器支廠跡地が青森師範学校（のちの弘前大学教育学部）の用地となり敷地内には附属小学校・附属中学校・学生寮なども置かれた。この他昭和20年代には三の丸跡に野球場・相撲場などの運動施設が、弘前大学教育学部敷地南側には公共職業安定所・青森県検察庁弘前支部・青森地方方法務局弘前支局などの官公庁が設置されている。

昭和30年代には三の丸跡に市立図書館・考古館・市民会館が、昭和50年代には市立博物館がそれぞれ開館している。また昭和30年代後半から50年代中頃にかけて弘前大学教育学部及び附属施設、公共職業安定所・検察庁・野球場などの施設が城址外に移転または廃止されている。平成2（1990）年には市立図書館も城址外に移転し、現在三の丸跡には市民会館・市立博物館・テニスコート・緑の相談所（昭和55（1980）年竣工）が見られる他はピクニック広場・ボタン園・植物園・市民広場といった緑地帯となっている。

IV. 弘前城址における施設の変遷

以上のことから、盛岡城址と弘前城址の土地利用変化を比較してみると、弘前城址の土地利用変化が顕著であると言える。そこでここではその弘前城址における明治以降現在までの施設の変遷を辿ってみたい。

まず最初に弘前城址内に置かれている、または置かれていた施設を、第1表にあるように5つに分類した。次に第1表で分類したA・B・C型の施設を、官公署・教育施設・文化施設・運動施設・宗教施設に分類し、変遷の過程を辿った。

弘前城址における施設の変遷の特徴として、A型とD型が多いことが挙げられる。また、弘前

第1表 弘前城址の施設の分類

類 型	施 設 名 及 び 設 置 年
A	稲荷神社（大正9（1920）年）、弘前大学教育学部（昭和21（1946）年）、公共職業安定所（昭和21（1946）年）、検察庁・法務局（昭和24（1949）年）、市立図書館（昭和35（1960）年）。
B	護国神社（明治43（1910）年）
C	建築工補導所（職業訓練所。昭和25（1950）年）、市営球場（昭和23（1948）年）。
D	武徳殿（明治44（1911）年）、市営グラウンド（昭和8（1933）年）、市民会館（昭和39（1964）年）、市立博物館（昭和52（1977）年）、緑の相談所（商工観光部公園緑地課。昭和55（1980）年）、弘前城植物園（昭和63（1988）年）。
E	第8師団兵器支廠（明治31（1898）年）、相撲場（昭和23年頃）。

- (A) 他地域から移転し、後に城址外に移転したもの。
- (B) 他地域から移転し、現在も続いているもの。
- (C) 城址内に新規に設置され、後に城址外へ移転したもの。
- (D) 城址内に新規に設置され、現在も続いているもの。
- (E) 城址内に新規に設置され、後に廃止されたもの。

城址は、昭和20年代には官公庁・教育施設の移転先として、昭和30年代末期から50年代にかけては文化施設の新設先としての性格が強い。

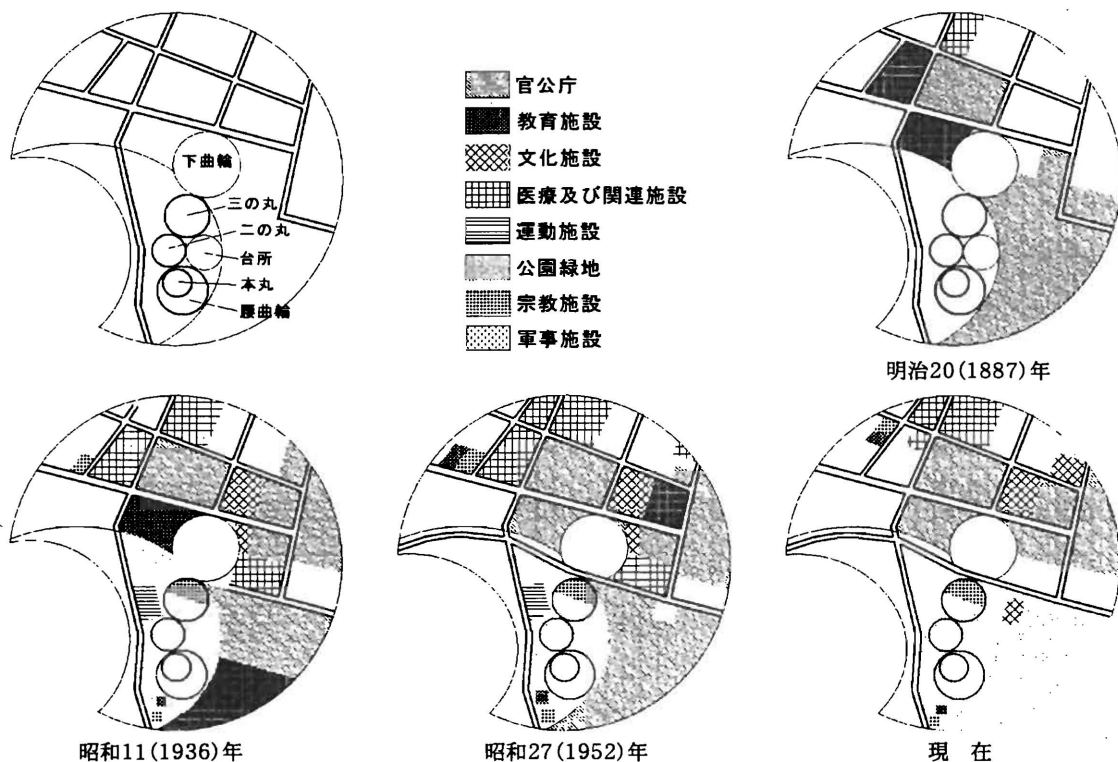
次にA型・C型の移動要因について見てみると、同種の施設の合併による移動（職業訓練所）、市制100周年記念施設（追手門広場）に伴う移動（市立図書館）の他は、史跡弘前城跡整備事業に伴う移転となっている。

また官公庁は城址外囲や市街地南部から東部にかけての旧市街と新市街の中間に移動し、最近では市街地縁辺部（東部）への移動も見られる。教育施設は市街地南部から東部にかけての旧市街と新市街の中間や新市街への移動が見られ、文化施設（市立図書館）は弘前城址内及び外囲での移動が見られる。

広大な用地を必要とする運動施設は市街地縁辺部（東部）の国道7号線バイパス沿いへの移動が見られる。また宗教施設は、官公庁・教育・運動施設の移動とは異なり、市街地北部の旧城下町内での移動という特徴がある。

V. まとめ

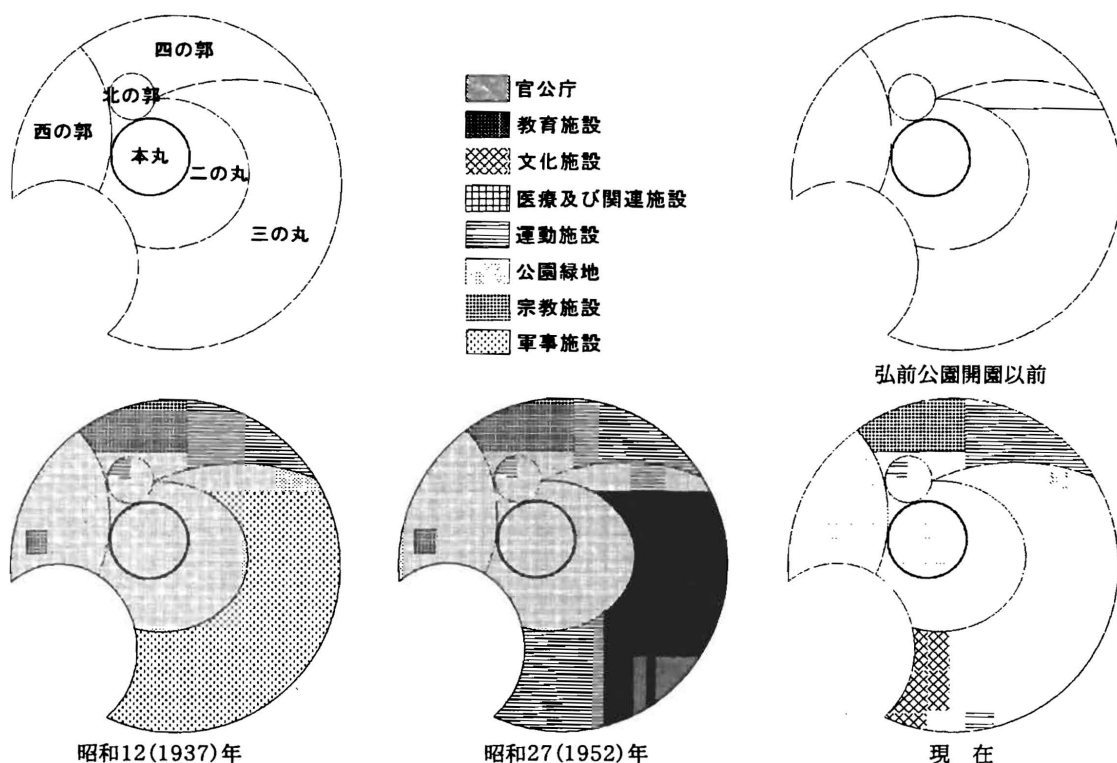
盛岡城址においては、明治期には官公庁・教育施設・医療施設・運動施設・公園緑地・宗教施設によって利用された。大正期から終戦まではこれに加えて医療施設が増加し、文化施設や金融



第3図 盛岡城址の土地利用変化

機関の本店・支店も見られる。またこの時期、教育施設の多くが城址外に移転している。戦後、昭和20～30年代には官公庁・医療施設・金融機関の本店・支店が増加しているが、昭和40年代には官公庁の一部が県庁舎や合同庁舎に移転、または城址外に移転している。昭和60年代には医療施設も一部を残して城址外へ移転し、現在では官公庁、教育施設（幼稚園）・医療施設、文化施設、金融機関の本店・支店、放送・通信機関が見られる。

弘前城址においては、明治期から終戦までは公園緑地・軍事施設・運動施設・宗教施設によって利用され、終戦後は軍事施設が廃止され、官公庁・教育施設・運動施設として利用された。昭和30年代にはこれに加え文化施設も見られた。



第4図 弘前城址の土地利用変化

昭和30年代後半から50年代中頃にかけて、官公庁・教育施設・運動施設が城址外に移転または廃止された。現在では公園緑地・文化施設・運動施設・宗教施設によって利用されている。

盛岡城址と弘前城址の土地利用変化を比較した場合、共通点として、①明治以降現在まで、官公庁・教育施設・文化施設・運動施設・公園緑地・宗教施設によって利用されたこと、②内山下にあたる盛岡城外曲輪跡と弘前城三の丸跡がそれぞれの城郭の中で最も諸施設に利用されていることが挙げられる。②について、弘前城址には大きな土地利用変化が認められるものの、盛岡城址には認められない。その要因としてまず、盛岡城址の場合、江戸期の藩主の邸宅や藩重臣の屋

敷といった広大な敷地の地割を基にして官公庁などの諸施設が置かれたのに対し、弘前城址の場合、元禄8（1695）年から宝永2（1705）年にかけて、三の丸の藩重臣などの武家屋敷が郭外に移転していたため、明治の廃藩以後自由に施設を配置できる状態にあったためであると考えられる。次に、盛岡城址の外曲輪跡には明治期に県庁・裁判所などの官公庁が置かれたのをはじめとして、官庁街が形成されていったのに対し、弘前は明治4（1871）年に県庁が現青森市に移されたため、三の丸跡には県の施設等は設置されず、尚且つ市役所などの官公庁も城址外囲に置かれたため、後に諸施設が利用できる状態にあったことも要因として考えられる。

【謝 辞】

本論文を作成するにあたり、快く資料等を提供して下さいました盛岡市役所都市計画課、弘前市役所社会教育課の方々に厚く御礼申し上げます。さらに、終始ご指導いただきました後藤雄二先生、小岩直人先生、福士壽一先生に深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・梅林 巖・阿部 隆（1981）：旧城下町盛岡の市街地形態の変化と都心地区の形成 東北地理, 33-3, 163～166.
- ・長江好道・三浦黎明ほか（1995）：岩手県の百年, 山川出版社, 368ページ.
- ・陸奥新報社（1995）：弘前公園誕生100年記念 弘前公園／愛されて100年, 105ページ.
- ・横尾 実（1987）：弘前の都市横造への歴史的制約 東北地理, 39, 304～306.
- ・吉田義昭・及川和哉（1991）：盛岡四百年下巻〔I〕 郷土文化研究会, 500ページ.